新井白石と利瑪竇

附　世界屏風圖考（下）

藤田元春

三、世界圖屏風考

一

大日本史料第十二篇の八、慶長十六年九月二十日の條には、家康が南蠻世界圖の屏風を覽るとあるさうしてその參考として、越前福井市川上町淨得寺の世界圖屏風なるものゝ三色刷1/10を挿入した。

史料の人の言によると、この圖は狩野永德の筆になれりといふが、永德は天正十八年に沒したれば、この圖と年代が會はぬといつて、頭からその僞作たることを明にしてゐられるが、しかし其對幅日本圖が古いといふことゝ、この世界圖が主として南洋貿易地方に詳しい（註この南洋地方が坤輿圖よりもよく出來てゐることは、白石のオランダ圖を見た時と同じ感である）から、この圖の年代が、慶長元和より寛永に至る頃だとき、併せてその一般の畫樣が、一五九六年版リンスホーテンの圖と類似の點少からず、よつて年代が推知されるとのべた。卽ち史料の人々は、この世界圖をみてリンスホーテンの航海圖に比較したのである。リンスホーテンの航海圖は、テレキにものつてゐる。いかにも南洋

は詳密の度坤輿圖にまさつてゐる。しかし當時の航海圖の南洋方面のものは皆この程度である、現に帝室博物館所藏の和蘭エダム出版の南洋鍼路圖(一五九八年版)をはじめ、末吉や、角屋又は原敎授の所藏される元和當時御朱印船の用ひた海圖等と、いづれも類似するのであるから、單にその畫風の類似を以て直ちにこの屏風の年代を定めるわけにはゆかない。

史料の人は、何故か一般の畫樣といふ曖昧な文句を以て、この地圖に對して批評を加へられた。地圖はいふ迄もなくプロゼクションによつて書かれるべきであるが、史料の人はこの地圖は、プロゼクションなどといふ考のない時代に出來たものであると認めたものでもあらうか。しかし此圖には明に赤道があり南北回歸線があり、經線もある、プロゼクションの考へがなくて、かうしたものは書けない。一見した所はメルカトルの投影法に類似するが、メルカトルは一種の圓柱投射法であつて、兩極の延長線が畫面と並行するために、極が出來ない。赤道を離るゝ程、緯度一度の間の距離が大きくなり、北米やアジヤの北方は非常に膨大するといふ缺點がある。そこでこの膨大を抑へるために工夫された新らしい一種の圓柱投影法がある。

それはメルカトルの如く兩極を無限に伸ばさないで、地球と同じ南北直徑の實長のある圓柱面で之をつゝみ、赤道面に接した直線を赤道とし、各緯線は之に並行に投影し、經線はいづれもこれに直角に交はらしめる。その結果一の平面方格圖が出來る。從つてこの圖の南北線は、與へられたる地球の

直徑に合し、東西線は與へられたる地球の圓周に合する故に、圓周卽赤道の長さは南北線の長さの三倍餘になるであらう、これを普通圓柱等面積投射法といふ。（Cylindrical Equal Area projection）

一見してこの屏風圖はこの圖法に類似するが、更に之を吟味すると赤道の長さが兩極の長さの二倍しかない（三倍餘はない）圓柱等面積投射法は經線が球の直徑と同じくなるから實長よりも短くなり、すべての緯線は赤道と同長になるから、之又實長よりも膨大する缺點がある。從つてあまり人が之を用ひない。又其發案者は Lambert であつて、一七七二年頃の人であるから、到底この屏風圖とは年代が合はぬ。但しメルカトルは千五百六十九年（永錄十二年）にメルカトル法による世界圖を出してゐるから、慶長頃にそれが日本人の眼に入つてゐても當然ではあるが、本圖は勿論メルカトルでない。

二

然らば本圖のプロゼクションは何？

その外形は卵形にしてある。利瑪竇を眞似てゐる。けれども、利瑪竇ならば、日本で正保二年初版寶永五年に再版となつた「萬國總界圖」又は天明三年に出來た「地球一覽圖」のやうにその經線が曲らねばならぬ。千五百六十九年のメルカトルは大英百科辭典に梗概がでゝゐる。それを見ると圖柄は全くちがう、但し圖の內容に於ては、このメルカトルの世界圖や、一五七〇年に出來た最初のオルテリウスに似た部分があるから、本圖が慶長頃に日本にわたつてきた世界圖に近似するものと云へないこと

はない。

しかし一歩をすゝめて考へると、本圖のプロゼクションは右にのべた東洋で最も早く印刻されたオルテリウスでもなく、次に康熙に出版された兩半球圖でもなくして、我國では德川氏の末期弘化三年に永井則譯安田雪州銅鐫の萬國方圖、もしくは嘉永六年癸丑初春に出版された地球萬國方圖に一致するプロゼクションである。

卽この世界圖の南北徑は東西徑の二分一に相當し、赤道の左右に南北回歸線と兩極圖とを記入するがやゝ寫し方に狂ひはあるけれども、回歸線は赤道から南北各二十三度半であるから極と極圈の間及赤道と回歸線との間、いづれも等距離に直線を引いてゐること、全く嘉永の方圖プロゼクションにひとしい。さうしてかやうに緯度一度の距離を赤道の上に於ける經度一度間の距離に一致せしめてゐる方格圖は、地圖學上ではやはり圓柱投影法の一つとみるべきであつて、赤道に接觸した圓柱面の展開であるから、之を獨逸語では Zylinderprojektion mit Längentreuem Aquator といふ。しかしその出來上りは經緯共に同長の方格圖であるから、一名之を quadratische plattkarte ともいふ。日本の學者が、古く世界方圖と譯したのはいかにも正しい表現であつた。

家光の枕屏風なるものも實にこの方圖の一であるが、北村泰一氏の覺書によると、それは慶長十六年(一六一一)蘭人來航の時、環宇全圖を献じた、それを家光が模寫し枕屏風とした。寛文三年に之を

侍臣梶佐兵衞に賜ひ、のち小野善助に傳へ、その子孫屏風を外して卷物としたが、印度より以北ヲーベ灣（今の R.Ob 河口なるべし）に達する一帶を失ふとなし。原本は震災でなくなつたが、辻博士の「海外航通史話」にその地圖の寫がのつてゐる。いかにもオビ河から印度に達する一幅がないので、環宇の全體を明にしがたいけれども、これによつてそのプロゼクションはわかる、果して所傳の如くであるならば、この枕屏風の原本は葡人献上のもので我國に最も早く渡來した方圖であつたといへる、そこで其內容を檢討してみると、いかにも其頃の世界圖を模寫したらしい。駿府御分物之內色々御道具帳の中には世界の圖三幅とあるから、同樣のものがあつたと見てよいやうである。

但し家光の枕屏風なるものは、この一六一一年に献上した家康の見た地圖にのみ從つて書かれたものではなく、他にちがつた原本があつたと考へられる點がある。それは大阪朝日新聞社編の「開國文化」に畏友牧野信之助氏が今度の展覽會に偶然に發見されたといはるゝ、千葉縣鷹見久太郎氏出品の「鷹見泉石模寫世界圖幅」なるものゝ存在である。

泉石は渡邊華山の先生であり「新譯阿蘭陀圖」を自ら圖を引いて自費出版した程の學者である、その人の遺品の一としてこの世界圖が出た。それには

「寛永十四年（西紀一六二四（丁丑八月於長崎書之、但公方樣へ上り候下書。」「元祿四未年歲孟春中旬再次摸寫之」。天保七申晩春寫」

といふ但書がある。寛永に將軍の命で長崎でかいたといふのであるから之をさきの北村家の寛文三年

(西紀一六六三)の但書と其の云ひ傳へとに比べて若干の相違がある。同じものであつたかどうかわからぬが、元祿四年(西紀一六九一)に再び模寫し、天保七年(西紀一八三六)に泉石が模寫したといふのであるから、傳寫の間に或は增加したところや略叙した所がなかつたとはいへぬ。故に北村氏の屏風とちがつてゐて當然である。

今その泉石圖の內容をみると幸にも同じ方形プロゼクションであり圖示する所は利瑪竇の地圖に似てゐる。しかしもし方形圖であるならば、北の方が擴大される筈であつてアジヤの北方は東西に延びねはならぬが、この圖はそれが左程にのびてゐない、日本本州の北に心臟形の蝦夷をおき佐渡を缺きカムチヤツカを缺如してゐる形は利瑪竇に近く、その舊大陸の圖形は恰も後世のボンヌ圖法に似たものであつて、眞實の方形圖ではない。原本を忠實にうつしたものと考へられぬ、同時に北村氏の屏風程に古いものではないと考へられる、蓋し元祿、天保兩度の變更をうけたからであらう、けれども北高海(裏海)が巨大であつたり、アフリカの水系が古いまゝであつたり、メガラニカと思はるゝものが爪哇の南にあつて、それにノバギネヤなどゝいふ名を記してゐない(淨得寺の圖にはこの名がはいつてゐる)ことや、ベーリング海の想像的存在などを記してゐるから、其地理的智識は北村氏の屏風圖に一致する、從つてこの方の原本も亦やはり寛永十四年以前のものだといつて差支がないと思ふ。

註　越前松平春嶽公の愛藏されたといふ地圖の屏風が東京益田男爵家にある。日本圖と對幅であつて承應年間のものだといふこと

である。今これを見ると日本圖は行基圖の一變體で、海岸線にわざと花形の凹凸がついてゐて、蝦夷がない、それで時代の智識に合する。さうしてその世界圖をみると、方格圖であるが、日本の形、南洋の島々、さては巨大なメガラニカすべて利瑪竇に從ひ、小瓜哇まで誤を共にしてゐる、しかし利瑪竇は楕圓形プロゼクションであるのに、この方は方格圖にしたので、プロゼクションの智識のない人がやつたから、アジヤの東北端が正しくのびてゐないといふ缺點が出來た。蓋しそれが當時の日本の地圖學者の程度であつたのである。

それとこの北村本とを比べると日本の形は頗似の行基圖であるが、益田本にあるメガラニカの如き巨大な形がないといふ大差があるので、北村本は利瑪竇圖よりも古い原本を見たことは確である。しかし梶佐兵衞が之を貰つたのは承應よりも後であり、それから卷物にしたのであるから、承應以後の補筆がないとは斷言しかねるのである。

所が淨得寺屏風の方はどうであるかといふと、さうした古いものでないといふ疑が發する、何となれば世界地圖の發達やプロゼクションの發達した跡を尋ねて然る後本圖をみると、それが北村氏の屏風圖や右の益田氏や應見氏の世界圖などに比べて、あまりにそのプロゼクションが立派である、地形も正しい、餘程地圖學と地理に通じた人でないと、かうはかけない、素人が描くと、應見泉石の智識を以てしても其プロゼクションに合しない地形圖になること右の模寫圖が、これを證明してゐるではないか、又北村氏の地圖でも誤つて一幅不用なものがあり、一幅重要な部分を失ひ、しかも東西徑は南北徑の二倍半に近いといふ大なる間違ひが出來てゐるのである。然るにこの淨得寺の地圖はいかにも立派に出來てゐるではないか。疑問はそこから起る。

三

畏友牧野信之助君は、この淨得寺の地圖は利瑪竇圖と、慶長頃の海圖とを以て模本にしたものだといはれる。いかにもさうであらうと考へるが、もし果して然らば當時一つは楕圓形プロゼクションであり、他は方格圖で、東洋印度洋の局部圖である所の（例令は大日本史料十二の五所載の末吉勘四郎氏所藏の海圖の如きもの）海圖とを見て、さて之を一つにまとめるのであるから、その手腕といひ其の地理的智識といひ非常に勝ぐれた人の存在したことを豫想する。天保頃に下つても、之を模寫した鷹見泉石圖の如きはどうやらプロゼクションに誤が出來てゐるのに、この淨得寺の屏風圖はさうした誤もない、立派なプロゼクションである、果して寛永禁書の前にさうした地理學者が日本に居たかどうか、東洋のみでなく世界を知つた學者があつたかどうか。寛永禁書の中には、利瑪竇や南懷仁の書が入つてゐるのである位であるから、禁書後直ちにさうした學問はひらけなかつた筈である。かうしたことが筆者の疑問とする所である。今海外に於て地圖といふものが出來た歴史を顧みてみると、文藝復興の時代がきて十三世紀にまづ伊太利の海港や、西班牙カタロニヤの海港に於て、コムパスマップといふものが出來だした。或はこれをポルトラノともいふ。それは地中海などの航海圖で、羊皮紙の上に磁石の十六方位の線を圖上の所々の中心から無暗やたらに引いたものである。それは上記したリンスホーテンの海圖又は末吉や角屋等の海圖に於ても同樣に用ひられてゐるから、それらも一寸みた所でコムパスマップらしい。けれどもリンスホーテンや、日本の慶長元和の海圖まで下ると、もはや

コムパスマップではない。

コムパスマップには勿論世界圖もある。例令は一三二〇年の Sannito's Map といふ球圖。一三七五年 Catalan Map of the world のごとき長方形圖、一四五七年の Fra Mauro の世界圓圖のごときこれであるが。航海圖でも、又はかうした世界圖でも、コムパスマップの時代には經緯線といふものが全然缺如してゐる。卽プロゼクションの考がなかつたのである。

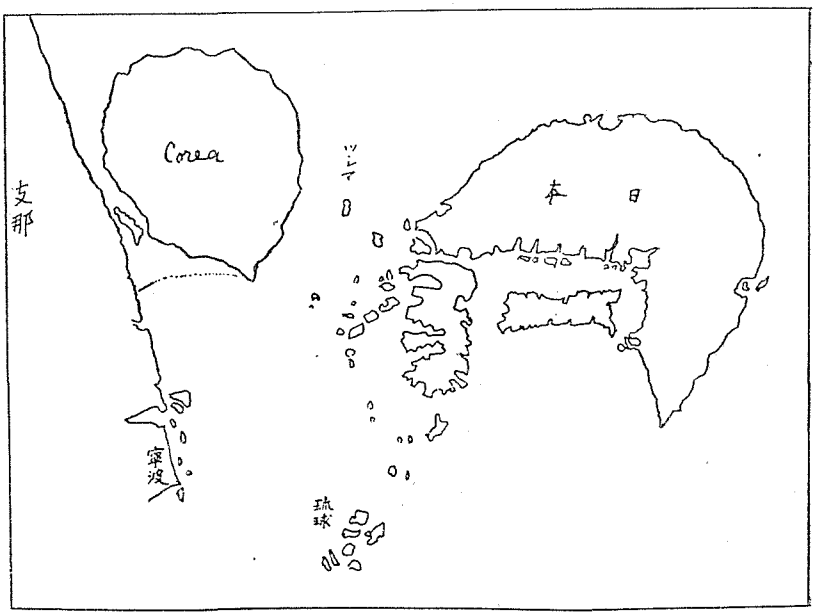
所が學問が進歩して一四一〇年以後トレミーの世界圖が復活し飜刻され又は珍重されることになつてから、（一四七五年にその最初の出版があつた、それは經緯線のある所謂トレミーの圖法であつて袋形又は梯形地圖とでもいふべきものである）。大に海圖をも刺激したので、其後海圖には經緯線が入ることになり、同時に又トレミーの觀測した地圖の誤りを直すことになつて、地圖學なるものが躍進する時代が來た。卽一四七四年にトスカネリの矩形投射法（Rectangular p.）の如き新しい地圖が出來て、太西洋を西に航して支那及日本にゆけるといふところの案内にもなつた。ついでマルチンベハイムの地球儀（獨逸ニュルンベルク博物館所藏）が一四九二年に出來るといふことになり、海上に於ける新發見者は競ふてその發見した土地を經緯線の中に記入することになつた。この時最初に現はれたプロゼクションは、所謂この plane charts であつて、南北兩極間の經線を軸とした圓柱展開法であり經緯度の一度の幅を赤道にとり、圖上には赤道と回歸線と極圈とを記入し、經線をも記すことになつ

た。やがてこの圖によつて、天測を行ひ航海中の位置を定めうるやうにもなつた。リンスホーテンもさうした地圖の一である

しかしこの方圖では平板になつてしまつて、地球といふ球の意味がわからぬから、一四六六年には之を改良して梯形投射法がニコラスグルマヌス（Nicolaus Germanus）によつて工夫され、一五一四年には心臓形投射法、一五二四年にはアピアンの卵形圖等、相次で工夫され、一五六九年にはメルカトルの世界圖が出來、ついで一五七〇年にはメルカトルに感化をうけたオルテリウスが地圖集（アトラス）を出版するやうになつた。同時にメルカトルのアトラスも一五九五年に出版されるといふ時勢になつた。この中でオルテリウスは一五九八年（慶長三年）に死去する迄に、二十五版を重ねる程盛行した。彼の地球全圖は卵形圖であつたが、利瑪竇も亦その坤輿圖をこのオルテリウスから飜譯したので同樣な卵形プロゼクションになつた。

さうした次第であるから、家光の枕屏風の原本が慶長十六年に渡來した時、それが方圖といふものが卽 plano charts であつたことは、ありうべきことであるが、果してその圖示する所が、その時代に合するかどうかといふことを吟味するためには、幸に手近に利瑪竇の坤輿圖があり、一五七〇年のオルテリウス（タイムスのサーヴエーアトラス所載）一五六九年のメルカトル（大英百科辭典所載）等があるから之を比較して確めることが出來るのである。

古い地球儀のマルチンベハイムにはまだ新世界はない。コロンブスも亦、トスカネリの地圖を信し新世界を發見したけれども、北米をアジヤから區別しなかつた。其後一五〇七年になつて Waldseemiller が始めて、アジヤと北米との間に海をいれたけれども、その翌年 Ruysch の圖は復び舊にかへり、グリーンランドを東アジヤに置いた。從つて北米とアジヤとをわけたのは一五六九年のメルカトルにはじまる、彼はこゝに Anian 峽といふ名をつけた、これはベーリング（千七百四十一年）の發見よりも百五十年も早い推察であつた。勿論オルテリウスもこれに從ひ、利瑪竇も亦「亞泥俺」といふ地名をいれてゐる。家光の枕屏風も全くこれに從つてゐるのであるから、家光の屏風は一五七〇年以後の歐州の世界智識に從つたものであつて、利瑪竇やオルテリウスの示めす所の南大陸、メガラニカをもつてゐる。勿論その南大陸の形は全く違つてゐるけれども特に南極圖をいれて、その樣子をしるしてゐる。そこで問題になるのは日本の形が四國、九洲、本州迄記入してあつて比較的とゝなつてゐる點である。メルカトルの世界圖には、朝鮮半島がなく、日本は一つの島であり、オルテリウスでも殆ど同形の一島であるが、利瑪竇になると、當時の支那人の智識が加はつて、九州、四國、本州、及佐渡北陸が入つて、野作（エゾ）は陸になつてゐる（第二圖）然るに枕屏風は本州、四國九州があつて、そのさきは何もない。リンスホーテン（一五九六年）は朝鮮を圓い島形となし、九州、四國、本州をしるし、それが「字形になつてゐて關東や東北を缺如してゐるが（第一圖）、同じく一五九八年の南洋鐵路圖も日本は



鮮朝と本日、寫略（版年六九五一）ンテーホスンリ
たつかなで明かし部南西は本日、りあで島は鮮朝

同樣半分だけ現はれて、朝鮮は大陸に入つてしまつてゐる。さうした次第で、日本海沿岸からずつと北海道や千島、カラフトなどいふものは、當時の世界地圖には不明であつた。これは前にも述べた通りで、野作（エゾ）の正しく知れるのは天明以後卽十八世紀のことであるからである。從つてリンスホーテンや南洋鍼路圖に比して、この屏風の日本圖が比較的整つてゐるのは、所謂行基圖といはるゝ當時の日本人の知識が加はつて改めたのである。しかしまだ蝦夷を正確に表現する知識も材料もなかつた筈である。鷹見泉石の模寫の如き蝦夷はあるが、佐渡が無く、本州四國九州の形は所謂行基圖の智識から一歩も出てゐない、又朝鮮の形も

不正である、而るにこの淨得寺の地圖は朝鮮も正しい、本洲、四國、九州が、行基圖以上に甘く出來てゐるといふ特色をしめすのである。この點に於て寛永頃の地圖であるといふことでさへ疑はしくなる。

オルテリウスや利瑪竇の地圖の缺點は、さきにものべた通り、東印度に無數の島を記入して正確でないこと、小爪哇や伯且及メガラニカなどがあることであるが、南洋鍼路圖も同樣である。然るに家光の北村本屏風は小爪哇も伯且も又其の部分にあるべき南大陸がなくて、南大陸は一幅丈東にうつり全く六十度の錯簡がある。（印度の幅を失ふたときに、この日本のある圖幅の南も失はれたらしいのである）さうして又泉石の圖幅を見ると、これも小爪哇や伯且はないが、しかし爪哇の南に不明の大陸があつて、そこに原本の古さをしめす。

オルテリウスやメルカトル、利瑪竇いづれも裏海の形を尨大にし、南アフリカの水系が特に奇怪であるのが當時の地圖の特色である。それはかの有名なダンヴィル D'Anville が一七三七年（元文二年）にアトラスを出したとき始めて、アフリカの表面から想像の湖水を除却したので有名な程に、後世になつて訂正されるものである、從つて當時の圖はこの裏海とアフリカの水系とが共通して誤つてゐるべきであつた。不幸にして北村本枕屏風は、缺如した所があつて、この部分の異同を明にしない、しかし鷹見泉石の屏風圖は慶長前後のさうした外國の世界圖に一致して誤つてゐるから、これを一五七

〇年の世界圖よりもやゝ新しい一六〇〇年前後の世界全圖であり、方圖のプロゼクションだとみて大過なしと思はれる。

註　さきに地球第十五卷第二號「利瑪竇の坤輿萬國全圖に就てなる拙稿には枕屏風も後世のものだ、日本の形がずつと新しいといふので、寛文以後のものと考へたが、それは誤つてゐたと思ふから訂正する。

四

そこで愈々問題になるのは、淨得寺の世界圖である。淨得寺の屏風は、第一にメルカトルの亞泥俺海峽をなくしてしまつた。北高海卽カスピ海及アフリカの水系はその誤りを繼承するが、南アメリカの形は、オルテリウスよりも正しい。次に東印度諸島の記事が正しいのみでなく、我日本の形が完成して、佐渡や東北の外に、夷(エゾ)が島となり、朝鮮が半島になつてゐる。白石の和蘭人に聞く所によると、こゝは慶長年代には猶不明であるべき所である。

アニアン峽をなくして北米の西部をボカしてゐるのは、勿論オルテリウス以後の地理的智識であつて、ベーリング探見以前の考である。故に一七〇〇年頃の世界圖には不明になつてゐる所であるが、(例は Wit 1700) それと本圖とは合致する。これは白石がオランダ人に聞いた時、未探險地であるから之を記さないのだと答へた智識をこゝに現はしてゐるのである。

つぎに淨得寺の屏風は、メルカトル以下永く記されてゐたメガラニカをなくしてしまつた新しさが

ある。さうして南回歸線の所にノバギネヤといふのを記入した。然し實際赤道に近い眞のノバギネヤの片影は別に正しく入つてゐる。ノバギネヤが赤道の近くにある場合には、その南のトレス海峽をへだてゝ（一六〇五年發見）そこにトレスデラオーストラリヤ・デル・エスピリト、サントと命名した大陸があるべき筈であつた。やがてリウイン以下オランダ人の探險で、新オランダといふ陸の名が出來てくるのであるが、本屏風はさうしたことに無頓着で、ノバギネヤをジヤバの南方洋中、あるべからざる所に記した。これは家光の枕屏風北村本でさへ敢て記さない誤である。但し鷹見泉石の屏風圖にはそこに無名の大陸が入つてゐるが、それはメルカトルの所謂 Beach Lucach Malture であつてノバギネヤではない。

さうして方圖をわざと卵形にしたゝめに、北海道から東北カムチヤツカ、オホーツク海千島等は切れてしまつて幸に見えぬことにしてゐるといふ作爲がある。蓋し家光の枕屏風の原本をみて寫したとしても決してかやうにはならぬ筈である。プロゼクションの智識がなくしては、決してこの藝はうてないものである。

テレキによると日本の形は一六五〇年（慶安三年の Janszonius の海圖にならぬとやゝ正しくはならない、併かも驚くことなかれ。丁度その頃、慶安四年版（一六五一）の日本地圖といふものが、京都帝國大學圖書館に珍藏されてゐるのを見ると、一枚の掛圖であつて行基圖を摸し、方向や地形を無視した

ものである。日本本國に於てさへ、出版業者の日本地形に對する智識は、行基圖以下であつたのに、Janszonius は却づてやゝ正確に近い日本の地形を、その地圖にのせたのであつた。恐らく行基圖の種類の中で正しいものが彼等の手に入つたからであらう。利瑪竇なども廣輿圖以上の材料を得てゐたとみえて、同書の崑山鄭子若の日本よりもやゝ正しい形になつてゐる。しかしどうしても、それらは行基圖から一歩も進んだものとはいへない。（拙稿、東洋に於ける地圖測繪の發達、郷土科學、八、九號）

從つて淨得寺の圖は、慶安よりも新しいもので、恰も白石が當時オランダ人について學んだ所の地理の程度に近いものである。卽彼の見たフラアの圖に類し北米西北部は不明であり。アジヤの東北部も亦同時に不明である、さうしてメガラニカは無く、新しくオーストラリヤが發見されかけたといふ時の、丁度さうした瞬間の知識を圖示したことになるのである。してみると淨得寺の屏風は、到底家光の枕屏風程に古いものではない。餘程後世の人が慶長頃の古さに合するやうにつくつたものとみられる。

但しメガラニカは、利瑪竇の圖にも、人跡未到の地で不明であつたのであるから、それを削るのはよいとしても、ニユーギネヤを入れた以上、當時の世界圖ならば、オーストラリヤの片影は必然なくてはならぬ、それにそれをかゝなかつたのは、慶長元和頃の海圖、たとへば角屋七郎次郎氏所藏の航海圖、末吉勘四郎氏所藏の東亜航海圖（共に川島元治郎氏の「海外貿易家」に入る）などをみると、其海

圖の目的が印度、支那、日本にあつて、南洋を略して書いてゐないから、恐らくこれに倣つて慶長頃の古圖にするために、後から故意に之れを眞似たのではなかつたかとも考へられる。

大日本史料の人々もその註記が主として南洋貿易地方であるとて、本圖の古い證左にしてゐられるが、いかにも、おらんかい、大明國、南京、廣東、たかさご、呂宋、爪哇、天川、交趾、柬蒲塞、暹羅等が記入されてゐて、右の角屋又は末吉の海圖と同系統のものを見てうつした證左が十分である。しかし摩迦陀國を「さまたら」島の上にかいたり、三佛をシャム洲に入れたり、印度の恆河平原に南蠻と記入するといふ始末で、角屋又は末吉などの海圖にはさうした誤がないのに、却つてその誤を平氣でやつてゐるといふ所に、この地名が古い證據にならぬのみでなく、却つて馬脚を現はす證明になると思はれるのはどうであらうか。

プロゼクションの智識があつて、同時に慶長元和の古圖を知つてゐて、しかも北米で亞泥俺峽を無くする、全體の經緯上の位置が北村本枕屏風又は應見本世界圖よりも正しくなり、圖柄が鮮明である等の特色ある點から考へると、この圖は決して慶長頃のものではない。恐らくはずつと後世の作爲ではなかつたかと思はしめる。

勿論この南洋のかうしたメガラニカがなくて、爪哇の南にニウギネアのある世界圖が從前皆無であつたと斷言するのではない、現に一五七四年（天正二年）の Paolo Furlani の世界圖（テレキ所載）をみ

るとアニアン海峽の眞南に一大日本島があり、支那に Maczipro といふ名が入れてあつて、南支那は不完全な地圖であるが、それに東印度諸島 Arcipelago de San Lazaro といふ記入があり、赤道の南に Nova Guinea といふのがあるべからざる所に書いてあつて、メガラニカを失つてゐるのがある、故に或はこのポーロフラアニの世界圖に近いものが原本になり得たと考へられぬではないが、しかも右の圖は南支那や東印度が全く不完全で極めて幼稚なものである。それを慶長當時の御朱印船に用ひられた立派な海圖の傳來したことに合せ考へるときには、この想像は事實あり得なかつたであらうと考へる。又右のポーロの圖は北村本や泉石の摸圖よりも遙に劣つたものであるから、旁々以て之をその頃の原本だとすることは出來ない。

五

大體日本でプロゼクションがわかるやうになつたのは餘程新しい、白石でさへ坤輿圖の平面半球の圖の意味はわからなんだのである、しかし弘化嘉永の頃になると新發田收藏の如き學者が出て之を研究し、世界圖は昔は楕圓形全圖であり、近頃は球圖と方圖とがでるが、しかし楕圓圖もよいからといつて、再びオルテリウスを復活し、「此圖卵形にして兩極規外の地勢殆ど眞を失ふが如し、これ兩圓圖の中心縮少し、平方圖(卽屏風のプロゼクション)の經度兩極に近きもの擴延すると同理なりとのべた程である。恐らくこの淨得寺の屏風の作者は、この新發田氏程の地理學者であつて、新しい方圖をみ

て、古い圖を摸作したのではなかつたかとさへ考へしめる。

その一證とも見るべきは我國での古い萬國地圖又は地理書、もしくは近くは紅毛雜話の、オランダ日本間の海路にものらないセントヘレナの孤島が、麗はしく「ゑれな」として記入されてゐることである。勿論利瑪竇には仙衣力拿とあるが、南懷仁の坤輿兩半球圖に至つて意勒納（エレナ）島と記入し、大浪山より歐州への往航の路と出てゐるものである。所がこの南懷仁の圖は白石と雖も見てゐなかつた地圖である。日本人が之を知るのは、白石以後のことである。從つて茲にエレナといふ名を記入する以上はこの一事を以てしても慶長寛永頃のものとみるのに、著しい支障となるであらう。

セントヘレナは一五〇二年蘭人の發見で、一五八四（天正十二年）日本の有馬大村の二使節が立寄つた島である。濱田博士が近く大英百科辭典からその記事を發見されたのであるが、たとへ百科辭典にその事がのつたとしても、大洋での往航のみによる孤島である。どうして日本の當時の人の暹羅や天川と同じ樣に意識されやうぞ。

西洋でもこれに注意したのは、さきに一八五七年の版のオランダ圖版について一言した通り、一八一五（文化十二年）ナポレオンが幽囚され一八二一年こゝに死してはじめて有名になつてからである、少しく早い喝蘭新譯地圖、（一七九六年版）でさへも勿論この島の名は入つてゐない、たゞ文化に高橋作左衞門のつくつた兩半球圖に初めて記入されシントヘレナと記されてゐる。それをわざと古い語の

エレナと記入したのであるから、恐らくこの圖の筆者は、德川時代を通じて餘程くわしい地圖の學者であつた、勿論慶長元和當時の學者ではなかつたことであらうと思はれる。

六

所がこゝに更らに注目すべき一つの世界圖屏風がある。それは堺市の山本吉次氏所藏の六曲屏風がある、牧野君は著しく裝飾的の要素をもつたものであるが、この山本氏の屏風は實用的のものであるとのべ、航路を割合に正確に描いてある、殊に往復路を區別して西洋から日本へ來る途、歸る路が書いてある。そのくる途にモザンビケ、ゴヤ、天河、肥前とあり、歸る途にツウラン、サントヘレシナ卽セントヘレナが記されてゐるとのべられた。(內國文化に寫眞がある)これは非常に珍らしいことである。もしこの屏風が北村本や泉石の摸寫原本と同時に日本に出來たものであるとすれば、淨得寺の屏風にエレナがあることは問題でないことになる。

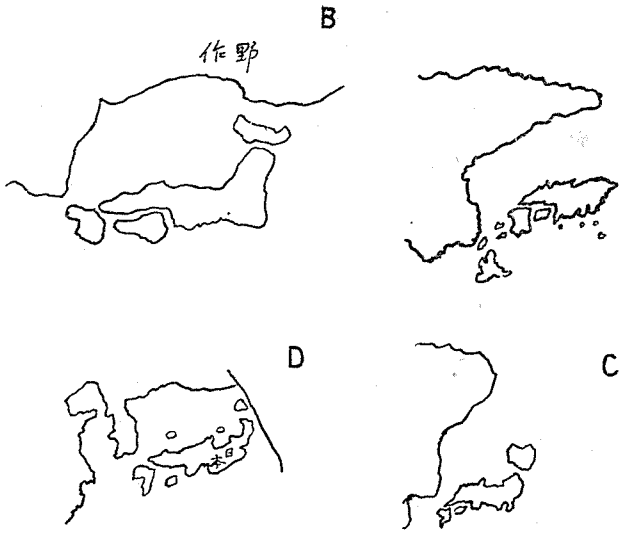
今その地圖を見ると、一見して淨得寺の地圖に類似した楕圓形であるが、その內容を見ると、これは驚くべき地圖であつて、一五七〇年のオルテリウスに從つた楕圓形プロゼクションである、曲線は引いてないが、其地形はタイムスアトラスにのつてゐる一五七〇年のオルテリウスと符節を合し、北極洋には東西に細長い陸があつて、五つに分れてゐることや、南洋にある pitta Corum Regio (後にはメグラニカと記される、不明の陸地)の曲線や、南米が四角に近い形、爪哇の南の小爪哇、北米の

水系等々全く之をひきうつしにしたものといつて差支へない。從つてこの圖は淨得寺の屏風とか、又は家光の枕屏風などとは全く違つた系統の地圖であつて、我國では珍らしい發見である。牧野君の報告に從へば世界圖屏風は種類が多い、（堺前田氏藏の如きは、極中心の半球圖である）しかし多くは方圖であるのに、中にはかうした楕圓圖があるのである。利瑪竇のオルテリウスは支那を圖の中心にするやうに改作し漢譯したのであるが、山本氏の地圖はさうした工夫をしないで、全然オルテリウスをそのまゝに寫したものである。從つて其原本の出版は非常に古いもので、元龜天正頃の存在であるもしもこの屏風が慶長元和頃のものときまれば、疑もなく當時からセントヘレナを注意した地理學者が日本に居たといふことになるのであるが、事實は如何であらうか、或は後世、世界のことが八ヶ間敷論じられるやうになつてからオルテリウスをみて之を寫したと考へるべきものでなからうか、全くこの山本氏の地圖は予は未見で、寫眞で見る丈けであるから、直ちに何とも云ふことが出來ないけれども、いかにも珍らしい地圖であるといつてよい。

しかし本圖が寫眞でみる通りであるならば、楕圓形のプロゼクションである。淨得寺の屏風のやうに方圖の投射法でない。從つてたとへ山本氏の地圖をみた後に、淨得寺の屏風をつくつたとしても、それはたゞ之を寫すといふ丈けでは出來る事ではなかつた。曲線の經線を直線に直して、兩極に近い地の幅をずつと擴げねばならないし、北極洋の五つの細長い陸塊を無視する見識と、後の世のメガラ

ニカを無くする學識を必要とし、古い Beach Lucach Maleuur や小爪哇を無視して、ノヴギネヤと記入する丈けの地理的知識が必要であるばかりではなく、手近い日本の圖についても、その一般的な行基圖程度の日本の地形を改訂して、猶一層正しくする丈けの原本を手にしてゐなければならない筈であつた。何となればそれ丈の各の差異が圖上に見られるからである。蓋し我國で日本總圖の正しいのが出來たのは享保四年吉宗が日本總圖をつくつた後のことである。それでも蝦夷は不完全であつた。その以前幕府で元祿總圖といふのを作つたが、建部賢弘の說く所によれば、その元祿圖は偏喝多く東西位を違へ、南北度を失ふたものであつた、但しそれは勿論民間には行渡つてゐなかつた。貞享四年(一六八七)丁卯五月相模屋大兵衞出版の本朝圖鑑目(これは外國へ輸出されて、テレキにのつてゐる)にさへ『南瞻部州大日本國正統圖行基菩薩の分形といふ、其跡を追て先圖雖有數多版、相違正道、故に畫き加へて今版行せしむる者也』と注した位で、石川氏は行基圖によつてかいた、恰も益田家の日本屏風の類に近いものである。この石川の日本圖は元祿四年に同所出版の日本山海圖道大全となつた、所謂石川流宣の繪く所のものである。

しかしてこの流宣の圖は爾後永く日本の正道圖となつて、慶安版や延寶版の行基圖の類の面目を一新し、多く海外にも流布して、テレキの日本等にはその摸刻の記さるゝものが多いのである。猶又近藤正齋の見た蠻人モルチールの日本圖の如きその好例であつて、圖中一六八八年デコウルテス發見の



A、北村氏蔵世界圖屏風の日本（蝦夷がない、朝鮮の形は不明である）
B、利瑪竇坤輿全圖の日本（エゾは大陸であつて佐渡北陸が島になつてゐる。朝鮮は不正である）
C、應見泉石の世界圖の日本（利瑪竇の日本に似てゐる）
D、淨得寺世界圖の日本（蝦夷が入り朝鮮の形も亦全く整つてきた）

島を記してゐるから、元祿元年以後の日本地圖であつたことがわかる、而してその圖は餘程正しく石川流宣の地圖に從つたものであつた。

そこで淨得寺屏風の日本の地形を以て、右の石川流宣やモルチールに比較してみると、これは不思議に立派であつて元祿當時に世界的に流布した日本の正道圖よりも、遙かに正しく記されてゐるではないか、蝦夷が丸く入つてゐる丈でも、その不備であつた流宣よりも一歩をすゝめたもので、扶桑輿地全圖（寫本）を見なくてはかけないものだと思はしめるものである。（但し泉石や益田家の圖は利氏によつて蝦夷らしいものがかいてある。しかし淨得寺のものよりもまづいのである）

從つていかに早い地圖としても元祿以前の日本の形ではありえない、勿論山本氏世界屏風の日本の形に比べても遙かに正しい、山本氏の世界圖は、オルテリウスに從

つたものであるが、しかしその日本附近だけは改竄して蝦夷を缺いた元祿の流宣圖に近い形であるから、それによつて時代がわかる。さうして之を泉石の模寫本に比べると、泉石の方は利瑪竇に近いから更らに古いといふ證左になる。

セントヘレナの記入といふことだけでは、新しいといふ積極的の證據にならないとしても、少くともこの日本の形の恰好から見る場合には、家光の枕屏風北村本といふのは、慥かに行基圖で最も古くつぎに鷹見泉石の模寫本は、（益田家本と同樣に）利瑪竇の坤輿圖に出た行基圖に一致して、時代は前者よりも新しく第二期の作であり、山本氏の屏風に至つては、右の元祿の石川流宜式の日本圖に近いから第三期に屬する。さうして淨得寺の屏風に至つてはその日本圖は更らに新らしく、蝦夷が入つて朝鮮が正しくなつてゐる。故に享保圖に近い形になるのである。（第二圖參照）

してみるとどう考へてもこの淨得寺の屏風を、家光の枕屏風、又は鷹見泉石の屏風と、同時に出來たものと認定することに躊躇せざるを得ないではないか。

山本氏の屏風は、いかにも珍らしい存在であつて、たとへそれが元祿以後のものであるとしても、一般の圖樣からみて、オルテリウス初版の模寫であるから珍重するに足りる。しかしそれにサントヘレシナがあるから、淨得寺本にエレナが記されてゐて當然だといふことは、輕々しく云へないと思ふ。

オルテリウスの一五七〇年版にはSt. Helna.利瑪竇の圖には仙衣力拿（セントエリナ）とあり、南懷仁の圖になつては

じめて意勒納（エレナ）島と記し、大浪山より歐洲への往航路としるした、（康熙甲寅西紀一六七四）、しかもその書は彼の「職方外紀」と共に禁書であつて、日本には入らなかつたものである。從つて淨得寺本のエレナは餘程後世、（享保）禁書令が弛んでから後に記入されたものでなかつたかと考へられる。從つてこの圖の出來たのは少くとも文化文政頃海內の人々が外國の事情を巨細に考へるやうになつた時に、古本をみてうつしたのではなかつたか、しかも其作者は餘程詳しい地圖及地理に親しんだ人であつたであらうと考へる。

もしさうだとすれば、丁度それが日本での地圖の出版にも一致し、當時の學者のプロゼクション理解の度に一致する。牧野君の說明を見るとこの屏風は越前三國の內田家から、弘化三年丙午に寺へ寄贈され、小判百十三匁の時代金五兩也とある。恐らく古い日本圖屏風（行基圖）があつたから、それに似合うやうな古さの世界地圖を誰かにかゝして、永德の僞印を押し、對につくつて、それを弘化三年に寄進したのであらう。恰も同じ年に、永井氏の萬國方圖といふものが出版されたのであつた。

七

寬永の枕屏風は家光の祕藏で容易に民間には下らなかつた、やがて海外との交通を禁じたのであるから、さうした時にこの圖をみて、かゝるものが作爲されるわけではなかつた。しかも越前あたりの寺にかうしたものが寄附されるやうになつたのは、蓋し一般の人心が外に眼がついてきてからのこと

である、況んや其圖がいろ〳〵古いのよりも、新しい智識の加はつてゐることを證明するに於ておやである。

嘆詠餘話（通航一覽卷二百五十）をみると

德廟の御仁澤にて、今は蘭學の草創ありし青木昆陽の餘敎にて、今は關より東にてもその書を解する道も開けたれば異域萬邦の地理の說をはじめ或は天文曆算、中略

此餘地理の世界に係れるの事は漢土は僅に職方外記、利氏輿地圖說（坤輿圖）の約說あるのみなり。却て我國にては幸にこの學近く開くるを以てそれらの上に出る。輿地譯說の精細なるもの十餘卷を出せり、これ和蘭の通路久しきを以て也、萬國四大洲方（メガラニカをのぞく、故に四大洲也）の事に至りては漢人のいまだ究めざる所を明らかにするものあり此一事すら外邦異域を知るの一益を得たり。

とのべてゐる、いかにも我國の地理學は享保以後に躍進し、前野蘭化の門人の中に、新撰泰西輿地圖說十餘卷を飜譯するものが出來た、卽福知山の城主栃木昌綱であつて、龍橋と號した人である、大名であつて蘭學者である、主として歐羅巴諸國の地誌を記述したものであつたが、いかにも漢人のいまだ究めざる所を明にしたものであつて、國益の一書たり得たであらうと考へられるものである。この他桂川甫周大槻玄澤の萬國圖說二卷、森島中良の紅毛雜話など同門の間に出た。

註　知友秋岡氏の所藏せらるゝ寫本桂川甫周の萬國圖說は一卷本であるが、其序言は他圖のものと同じく白石のみたヨアン・フラアの圖が大府に現存してゐる。その圖で白石が采覽異言を著したが、今又甫周等もそのフラアの圖をみて、この圖說をつくる由が特記されてゐる、これ實に秋岡氏が上野博物館の地圖フラアの兩半球圖を以て、白石の見た地圖だといはるゝ有力な資料である。

氏はこの書によつて、白石の見た兩半球圖につき近くその考說を出される筈である、果して然らば白石の見たブラアの圖の我地理學の發達に對する位置は愈々重要になつたものと考へて敢て之を一言する。

やがて天明から寛政になるとさうした地圖を見てこれを出版するものが現はれた、卽寛政四年には我國銅版の開祖司馬江漢の天の圖と地球全圖とが出來、後者は兩半球圖であつた、恐らくブラアの圖に刺戟されたことであらう、ついて寛政八年に橋本宗吉の喝蘭新譯地球全圖などゝいふ劃期的の世界地圖が出た（註前章福本氏の兩半球圖を以て我國兩半球圖の初見としたのは誤である。畏友芦田伊人氏の注意によつてこの事をこゝに一言しておきたい）

さうした氣運に際し一方は長久保赤水の山海輿地全圖とか、南贍部州萬國掌果圖といふやうな低級な地圖が出版されてゐた時代である、恐らく楕圓形のプロゼクシヨンや、兩半球圖などに現れた投射法の學問が明になつて然る後初めてこの擬古の枕屏風も出現しやすい氣運に向つたのではなかつたか

ナポレオンの流されたのは文化十二年である、高橋の地球圖は文化七年に出來て、既にシントヘレナの名があるのであるから、單にこの島の名だけで以て、この屏風圖の年代は定まらない、けれどもこれを我國の地圖の出版の歷史から見て、又同時に地理の學の進步した道行から見て、淨得寺の方形地圖は早いものではないと思ふ。

これには註記の地名を極めて粗漏にしたといふ器用さがあり、プロゼクシヨンも合理的であるからたとへ原本があつても慶長元和といふものではなく、白石の見たブラアの地圖に近く、しかも右のメ

ガラニカ丈けは山本氏地圖の古い形を破つて、日本や朝鮮を新らしくしたといふ點から、まづ享保以後或は天保弘化のものではないかと思ふのである。

しかしだからこの圖は參考にはならぬとは云ふのではない。文化發展の好資料として、かうした作爲を加へた點がいかにも珍らしい屏風であることは、予の確認する所である。たゞその製作年代について疑ふのあまり、かうした事まで想像をしたのに過ぎない、この點讀者の諒恕をうることゝ信じて擱筆する。

○追記　本論文を草するに當り、京都帝國大學圖書館や地理教室所藏の多くの日本版世界地圖及藤堂司書藏本開國文化大觀を見たことを附記して感謝の意を表する。

○書後吉野作造氏の著に「新井白石とヨワン・シローテ」なるものゝあることをきゝ且之を一讀した、余は讀者の之を參照されんことを望む。

○又云ふ東學雜誌第三十一編第五號に西田與四郎氏の「長久保赤水の地圖について」といふ論文には赤水の萬國輿地全圖は楕圓式であると論じ、世界圖屏風はメルカトルであるとしるしてある。これは西田氏の誤であらうかと考へる、併せて參照せられんことを望む。

○兩半球圖には普通、平射圖法 Stereographic と兩半球圖法グローブラー Globular が用ひられる、後の方は其の出現は遲い、知友秋岡氏の前信にはブラウの圖はグローブラーと記されてあり、橋本宗吉氏の著オランダ新譯地球全圖がグローブラーに近似してゐたので、余は輕々にも前號に右の白石の見た地圖をグローブラーならんと述べておいた、然るに今回正しく實物にあたつてみると、さうでない、寛政四年の司馬江漢の地球全圖、橋本の地球全圖、高橋の地球全圖等共にいづれも Stereographic であつ

て、正しくグローブラーではないことがわかつた。これも亦知友秋岡君の注意に從つて、こゝにこのことを追記して、余の誤れる所を正しておきたい。更に牧野信之助君の開國文化にのせられた圖版に負ふ所の多いことを記して併せて感謝の意を表する。

（昭和六年六月）